

<全体分析>

試験時間

75分

解答形式

式・説明を含む記述式、およびグラフ選択。

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

大問が1題減少し、設問数も4問減少して28問になった。また、解きやすい問題が増加した。

出題の特徴や昨年との変更点

記述、導き方の明示、グラフ選択など多様な解答が要求される。

昨年より試験時間が15分増加し、解答時間に余裕ができた。

その他トピックス

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
〔I〕	記述 グラフ選択	(力学) 運動方程式 単振動 相対運動	物理基礎 物理	ばねにつながれた二物体の単振動、相対運動の問題。2015年〔I〕に類似した問題が出題されている。問4は、ばねの伸びと相対運動をきちんと整理できたかで差がつく。問6のグラフの選択として不適切な理由を書くのは珍しい。	やや難
〔II〕	記述	(熱) 熱量の保存	物理基礎	熱量の保存をメインとした典型問題。問2、問3は数値計算を丁寧に進め、単位も忘れないようにしたい。	やや易
〔III〕	記述	(電磁気) 電流が作る磁場 電磁誘導	物理	直線電流が作る磁場、電流が磁場から受ける力、電磁誘導の問題。問5は見慣れぬ設定だが、磁束が電流の大きさに比例していることに気づくと解ける。問6は、2023年〔III〕を解いていたなら勝負できたであろう。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

解答にいたるまでを説明する論述式の問題が複数あり、難問ではないが公式の丸暗記だけでは解けない工夫された問題も多く出題されている。論述式や工夫された問題に対応するためには、漠然と公式を用いて解くだけでなく、物理的な根拠を意識しながら解答にいたるまでの筋道を把握して問題を解くように心がけてほしい。また、空欄補充問題では物理用語を問われることもあるので、教科書には必ず目を通して用語の物理的意味を確認しておこう。さらに、教科書に書かれている公式(単振り子の微小振動の周期や円運動の向心加速度の式など)を自力で導出できる練習も必要である。また、原子分野も含めて苦手な分野を作らないようにしておきたい。最後に、解答作業に必要な時間配分を習得するためにも過去5年間の問題は必ず解いておくこと。